

新日下川放水路における インフラツーリズムの取り組み

高知河川国道事務所 計画課 福増 綾乃
高知河川国道事務所 建設専門官 笥 泰昌
高知河川国道事務所 総務課 甲藤 理子

日高村の浸水被害を解消させることを目的に建設中の新日下川放水路は、令和5年度中の事業完成に向け事業推進中である。運用に先駆け、現場見学会やツアー、イベントを行っており、合わせて約3500人が訪れている人々から関心の高いインフラである。新日下川放水路はインフラツーリズム魅力増進プロジェクトにおいてモデル地区に選定されており、新日下川放水路を中心に、暮らしを支える様々なインフラ施設を観光資源として活用することにより、地域活性化を目指している。本稿ではツアーやイベント等の広報活動やその取り組み結果、インフラの観光資源としての活用について報告する。

キーワード 広報、インフラツーリズム、住民参加、キャンプ

1. 日高村の概要

日高村は、高知県のほぼ中央部に位置し、南北を山々に囲まれており、村の中央部を貫くように仁淀川の支川日下川が東西に流れている（図-1）。

高知市から約16km、車で約30分でアクセスできる、日本の、高知の、ほどよい田舎「日高村」として豊かな自然を活かした観光にも力を入れている。



図-1 日高村位置図

農業を主な産業とし、特産品として高糖度トマトのブランド「シュガートマト」、お米、西日本有数の栽培面積を誇る「霧山茶」、生姜などの生産に力を入れている。中でも日高村のトマトを使用したオムライスを提供する「オムライス街道」は、多くの観光客が訪れるなど、日

高村の目玉事業として注目されている。

2. 日高村における治水の概要

(1) 「水との闘い」の歴史

日下川の河床勾配は1/3000程度と極めて緩く、水はけが悪いという特徴を持つ。また、日下川の流域は仁淀川本川から遠ざかるほどに標高が低くなるという低奥型の地形である。さらに洪水時には仁淀川本川の水位が支川水位より高いことも相まって、日下川流域に位置する高知県高岡郡日高村では古くから浸水被害に悩まされてきた。

嘉永2年（1849年）の大洪水では仁淀川各所で堤防決壊が発生し、日高村でも甚大な被害があったことが記録されている。

先人たちは、水害から生命や暮らしを守るため、仁淀川と日下川との合流部に水門や背割り堤といった治水施設を壊れては建設することを繰り返してきた。仁淀川から日下川への逆流を防止するための神母(いげ)樋門は、村民総出で協力して建設され、大正3年（1914年）に完成している（現在の樋門は昭和62年（1987年）に完成）。

その後、昭和21年（1946年）に発生した南海地震を起因とした地盤沈下により深刻となった浸水被害を解決するために、県事業としてトンネル放水路（派川日下川3.7km）が昭和36年（1961年）が整備された。

しかし、昭和50年（1975年）には、仁淀川中流域における記録的な豪雨により、戦後最大規模となる浸水被害が生じた。これを契機に、国の直轄事業として日下川流



図-2 日高村の治水施設「放水路」「樋門」「調整池」

域で2本目のトンネル放水路（日下川放水路5.0km、昭和57年(1982年)完成）が、また県事業として日下川調整池（平成10年完成）、戸梶川調整池（平成23年完成）が整備された（図-2）。

日高村の300年を超える「水との闘い」の結果として、面積約45km²の小さな村内には「樋門（とめる）」「放水路（ながす）」「調整池（ためる）」の3本柱の治水施設があり、これらの施設が一体となって機能することで治水効果を発揮してきた。

(2) 新日下川放水路の建設

前述の治水施設建設にも関わらず、平成26年8月の台風第12号、第11号では甚大な浸水被害が発生した。中でも台風第12号では日高村では159戸（床上109戸、床下50戸）が浸水し、また、浸水により国道33号が最大約16時間の通行止となり、JR土讃線の一部も運行休止になるなど交通網も遮断された（写真-1）。



写真-1 日高村内の浸水被害（平成26年8月）

台風第12号による甚大な浸水被害を受け、平成27年度に「床上浸水対策特別緊急事業（日下川）」が採択され、国の直轄事業として3本目の放水路の整備が決定した。また、放水路の整備に合わせて、高知県（日下川、戸梶川の河川改修）、日高村（浸水防止壁、周囲堤の設置やソフト対策）も一体となって床上浸水被害の解消に取り組んでいる。

新日下川放水路は、日高村からいの町に至る放水路で、平成30年1月から工事に着手し、令和5年5月30日から運用を開始しており、令和5年度末の完成を目指して施工中である。（写真-2）



写真-2 新日下川放水路呑口の状況（令和5年6月時点）

3. 放水路を活用したインフラツーリズム

インフラツーリズムは、普段訪れることのできないインフラ施設の内部や日々変化する工事現場などの非日常を体験するツアーを地域と連携して展開することにより、インフラへの理解を深めていただくとともに、地域に人を呼び込み、地域活性化に寄与することを目指すものである。

令和2年8月には、国土交通省「インフラツーリズム魅

力倍増プロジェクト」のモデル地区として、「新日下川放水路」が選定され、新日下川放水路を新たな観光資源として価値を高め、地域活性化につなげることを目的に、国、村、観光協会等で連携して協議会や意見交換会等を重ねた。協議会等では民間主体でツアー等を開催できるよう、日下川の災害や河川改修の歴史、新日下川放水路の工事概要などをツアーの際に説明する内容をまとめた「日下川ガイドマニュアル」（図-3）の作成や、ガイドの説明力向上のための研修等を実施してきた。



図-3 ガイドマニュアル

(1) 民間主導のツアー等の実施

新日下川放水路は、工事着手以降、延べ3,500人を超える方々が工事現場の見学に訪れているが、新日下川放水路の運用開始後は、民間による収益事業としてインフラツーリズムを自走化することを目指し、令和3年度より民間主導のツアー等を行っている。（表-1）

ツアーは事前に、観光協会を中心に日高村、現場担当者等を含めて行程やルートの確認、注意事項等についての打ち合わせを行った上で実施した。

民間主導のツアーは有料にも関わらず多くの参加があり、「普段は体験できないことがたくさんあり、充実することができました。」「貴重な機会をありがとうございました。」などの感想をいただき、好評なスタートを切っている。（写真-3）

表-1 新日下川放水路におけるツアー等一覧

ツアー等	実施日	参加人数	金額
仁淀ブルー体験博	2021年11月7日	28名	1,000円 小学生以下500円
	2021年11月28日	28名	1,000円 小学生以下500円
	2022年10月30日	20名	1,000円 小学生以下500円
	2022年11月6日	20名	1,000円 小学生以下500円
バスツアー	2023年3月13日	22名	11,000円
吐口側ウォーキング	2023年5月21日	38名	1,000円
バスツアー	2023年6月13日	16名	12,500円



写真-3 ツアーの様子

(2) 新日下川放水路完成プレイベントの開催

新日下川放水路では、インフラツーリズムの一環として、運用開始を間近に控えた令和5年5月20日から21日にかけて、「日本初！放水路ダークキャンプ」と題して、運用開始前にしかできない放水路トンネル内で宿泊するキャンプイベントを開催した（図-5）。また、キャンプイベントに合わせて「放水路トンネルへ行こう！マルシェ」（主催：日高村観光協会）も同時開催した。

本イベントは、日高村やいの町、観光協会と共に企画・実施したもので、キャンプだけでなく、特産の和紙を使ったランプシェード作り、新日下川放水路の現場見学会を盛り込んだイベントであり、初心者でも参加しやすいキャンプイベントとするため、いの町と協定を締結しているアウトドアブランドの協力を得て希望者へテントおよびBBQコンロの無償貸出を行ったほか、



図-5 キャンプイベントチラシ

名称も、より多くの方々の印象に残るよう担当者同士で意見を出し合い決定した。

Twitterに加え、ラジオ出演などの広報の結果、キャンプには17組46名が参加し、真っ暗な放水路トンネル内でのキャンプを楽しんだ様子で、「異空間体験でした」「また参加したい」「他にはない環境のなか子どもたちも暗闇を楽しんでいた」などの感想をいただくなど、大変好評であった。（写真4、写真5）



写真4 キャンプの様子



写真5 マスコミ取材の様子

同時開催の現場見学会も県内外から約300名が参加し、「マルシェ目的で来たが、見学会に参加して良かった。子ども達も普段できない体験に興奮していた。ちょっとした冒険気分。また帰り道で放水路の意味を説明してあげたい。」「治水のために尽力されているのが分かった。経緯や作り方が分かりやすかった。」などの感想をいただいた。

4. 今後のインフラツーリズムの展開

新日下川放水路は令和5年6月時点で約3,500人が訪れており、完成前の現場見学会やイベントで実施したアンケートでは、約9割が満足したとの回答で、「放水路の見学を家族や友人、知人におすすめしたいか」という質問には、約96%がおすすめしたいとの回答であり、新日下川放水路が多くの方に満足いただける観光資源ということが分かる。

完成後は、放水路トンネルの特徴を活かし、日高村や日高村観光協会等が主体となったインフラツーリズムの場としての活用を予定している。（図-6）

具体的には、日高村では、新日下川放水路でのインフラツーリズムにあたって、『巨大な水のトンネルは未来へのトビラ。』というコンセプトを掲げ、水害と闘ってきた歴史や水と共生する暮らしを楽しみながら学ぶことを目的に、管理道の入り口にインフラツーリズムの玄関口となる公園を整備するほか、単なる施設見学にとどまらず管理道内でのプロジェクションマッピング、呑口導水路でのマルシェなどのイベントを開催することを考えている。

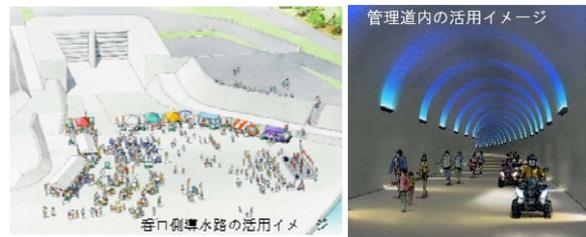


図-6 活用イメージ

5. おわりに

本報告では、新日下川放水路におけるインフラツーリズムのこれまでの取り組みと今後の展開について紹介した。

現場見学会やイベントにおいて実施したアンケート内の「今後、見学してみたい公共施設はあるか」との質問へは約5割の方が“はい”と答えており、新日下川放水路の見学がインフラへの興味を引き理解を深めるきっかけになったのではないかと考える。

新日下川放水路を単なる治水施設の枠にとどめることなく、地域の活性化に資する観光資源として活用すべく、日高村のインフラツーリズムの取り組みに協力していきたい。